

千葉県八千代市
村上供養塚発掘調査報告書

1974

上高野原古墳発掘調査団
八千代市教育委員会

例　　言

1. 本書は、千葉県八千代市村上台1918-2（字黒沢台）に所在する塚の発掘調査報告書である。
2. 報告書の執筆・製図は、主として村田があたった。
3. 報告書にトレンチはTと略した。

目　　次

1. 調査にあたって.....	1
2. 遺跡をとりまく環境.....	5
3. 調査経過.....	7
4. 遺構.....	13
5. 出土遺物.....	16
6. まとめ.....	24

調査団名簿

挿 図 目 次

第 1 図	村上供養塚位置図	1
第 2 図	村上第 1 塚群	3
第 3 図	村上第 2 塚群	4
第 4 図	村上供養塚平面図	6
第 5 図	A T 北壁断面図	9
第 6 図	B T 東壁・南壁断面図	10
第 7 図	D T 西壁断面図	11
第 8 図	C T 北壁断面図	12
第 9 図	E T 東壁断面図	12
第 10 図	遺物出土平面図	14
第 11 図	遺物出土位置図	15
第 12 図	主体部出土土器（No. 1）	18
第 13 図	主体部出土土器（No. 2）	18
第 14 図	主体部及び A T 出土土器	19
第 15 図	主体部 No. 1 出土銅錢（その 1）	20
第 16 図	主体部 No. 1 出土銅錢（その 2）	21
第 17 図	主体部 No. 2 出土銅錢（その 1）	22
第 18 図	主体部 No. 2 出土銅錢（その 2）	23

図 版 目 次

図版第 1	1 発掘前風景
	2 西方から見た塚
	3 北方から見た塚
図版第 2	1 発掘風景北方から
	2 村上第 2 塚群風景
	3 発掘風景西方から

- 図版第3 1 A T 土層断面
2 A T 記録風景
3 B T 銅錢出土状態
- 図版第4 1 A T 土器出土状況
2 A T の土器と主体部の壺が露出したところ
- 図版第5 1 主体部No.1・2、及び8の銅錢
2 主体部南方からB T をのぞむ
3 主体部土器出土状況
- 図版第6 1 主体部No.1
2 主体部No.2
- 図版第7 A T 出土土器 A-3~7
- 図版第8 主体部出土土器 No.3~7
- 図版第9 1 主体部No.1より出土の寛永通宝
2 主体部No.2より出土の寛永通宝
- 図版第10 1 上段は主体部No.1より出土の北宋及び明錢、下段は主体部No.2より出土の北宋及び明錢
2 単独出土の寛永通宝 A-1・2, B-1・2, 主体部No.8

1. 調査にあたって

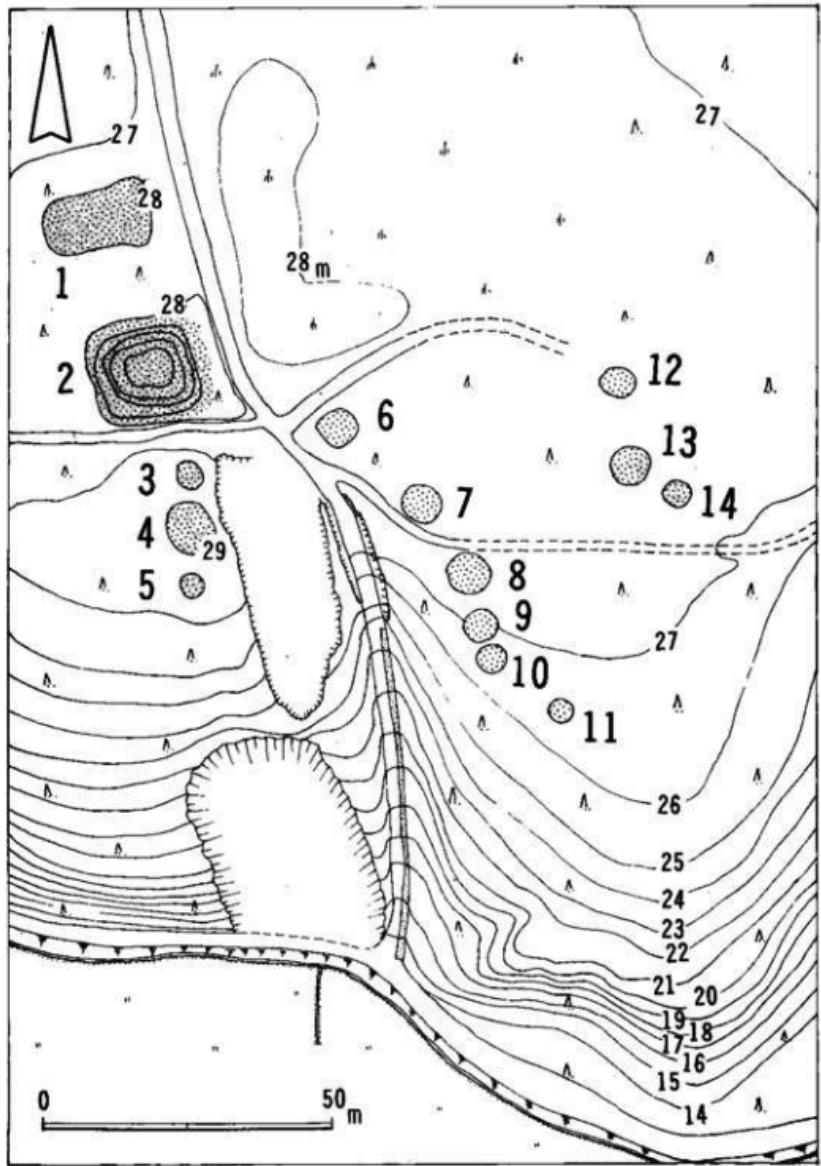


八千代市都市計画道路3・4・1号線のうち、村上地区の土木工事に伴ない黒沢台にある高塚一基が工事路線上に若干かたり、作業の過程で約半分は削平されることが予想された。

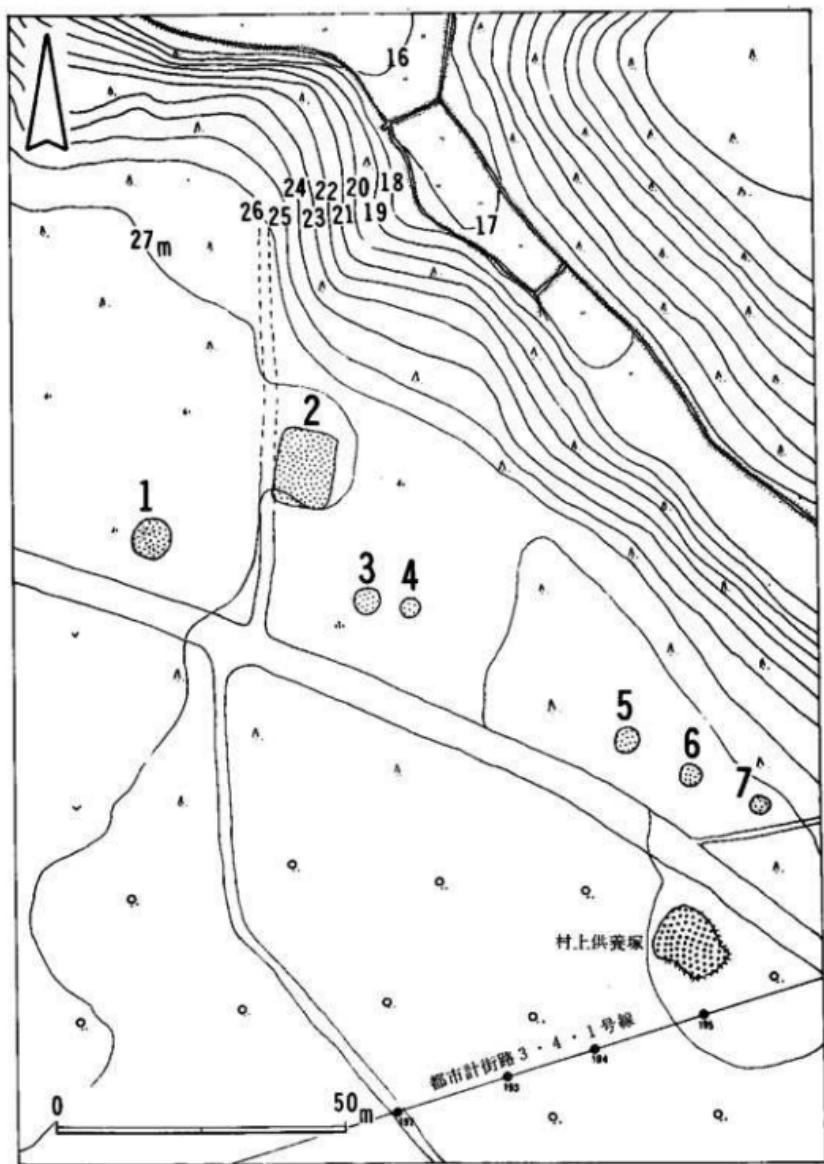
この塚から前方の道路を越えた北方12mのところに3基の塚があり、さらにこれより西方に4基が群集し、全体としてこの8基で一つの群となっていたと思われる。地区名としては道路北方の7基が旧小字込の内に属し、道路南方の一基が旧小字黒沢台に属している。このうち込の内の7基は日本住宅公団村上団地の敷地内となったところから昭和48年に千葉県都市公社文化財事務所によって発掘調査されたが、公園敷地外とあって黒沢台の一基は調査対象とならなかったものである。旧小字黒沢台には、この塚南南西350mのところに14基を一群とした塚が知られており、このうち最大の規模を持つ一基を、昭和47年に千葉県教育委員会で調査し、さらに昭和48年には前記込の内の塚の発掘調査に先だって、ここに7基が調査された。こうして周辺の関連する塚がよろこばしいことではないが記録保存された中にあって、本塚だけを無調査のまま都市計画道路とすることは、文化財行政面からみて、好ましからぬ前例を残すことになると考えた市当局は、都市計画課、教育委員会等の関係部課と協議の結果、記録保存のための発掘調査を行なうこととした。なお本塚は込の内の住宅公団内の塚と一群のものであるため、千葉県都市公社文化財調査事務所から調査員の派遣を、県文化課に斡旋して頂けるならば一貫した調査となり、最も望ましい結果となるとの市文化財審議会の意向もあり、市教育委員会は県文化課に主旨を述べお力添えを願ったが、調査員の少ない昨今、スケジュール的に同調査員による調査は望めず、市独自に調査を行なうこととして、市文化財審議会に発掘調査團の編成を依頼した。この結果、組織された上高野原占墳発掘調査團によって、3月21日から3月31日まで10日間にわたる調査を行なうこととなった。この調査は、現況すでに裾部を荒された一基の塚にそぞろ市当局の文化財重視の熱意の表われであり、市民の中にこれを望む風潮の高まりに応えたものと言えるであろう。

調査団長 増田誠蔵





第2図 村上第1採群



第3図 村上第2群

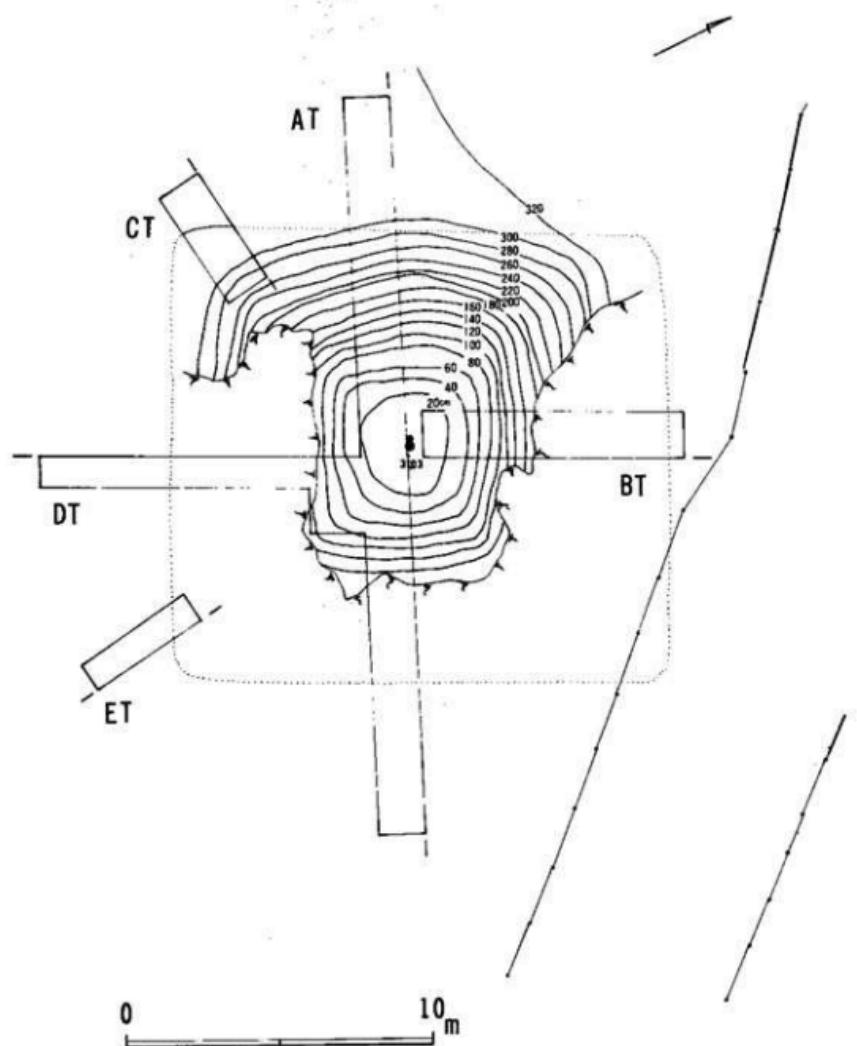
2. 遺跡をとりまく環境

八千代市は南北に貫通する新川をはさんで東西に地域は分れるが、村上供養塚はその東半分の標高27~8mの台地にあり、京成電鉄線勝田台駅より北方1.3kmに位置する。塚の東北方には工業団地があり、北方から西方にかけては日本住宅公園用地である。南は黒沢池の谷が奥深く侵入し北側にも谷が西から入り最奥部の通称ポンポン清水に面している。つまり印旛沼に注ぐ新川沿いの大きな谷と隣接の佐倉市との境をなす上高野川が東から樹枝状に台地をきざみ無数の支谷を形成する台地上である。塚の北側を通過する道は村上の辺田前から上高野をぬけ佐倉市井野へ抜ける古道である。したがってこの塚の存在は山林と畠地の中にあって通行人の目印ともなっていたであろう。

村上の地は和名抄に見える「村神郷」と考えられ、古い七百余所神社や、正覚院には県指定文化財の木造瓢迦如来立像などもあり、古くから開けていた所である。したがって、この台地一帯が古代の遺跡群である。日本住宅公園用地内については、千葉県都市公社文化財調査事務所やその他によって発掘調査がなされ、主として弥生時代及び古墳時代の遺跡が多数明らかにされている。またこの塚の南側には縄文~古墳時代の住居址が埋蔵されていると思われる。これら周囲には約10ヵ所の遺跡が登録されている。そのうち本遺跡は千葉県記念物所在地図所載のNo.277上高野原古墳である。

当初塚の数は古墳を含み17基と数えられたがその後の調査でこの地域には2グループにわたって計22基が塚として確認されている。それを村上第1塚群と村上第2塚群とに分けた。第1塚群は台地の西南に位置し第2図の如く14基を数え、第2塚群は本遺跡を含む地域で第3図の如く古道に沿って8基を数える。このうち、現在までに第1塚群のNo.2・6~14と第2塚群の1~4までは発掘調査がなされており実態がある程度判明している。その内容についてはまとめふれることとするが、同グループにあって本遺跡ときわめて関連深い。

以上本遺跡をとりまく環境を簡単にのべてきたが、第1・第2塚群計22基について伝承や記録がない。それはこの種の塚にありがちなことである。またどの塚にも石塔のたぐいは全く見られず、土地の人も知らないとのことである。本遺跡は発掘調査の結果古墳ではなく近世の供養塚であることが判明したことと、また本遺跡の所在が上高野原地点にはないことから村上供養塚と称し、その調査結果を報告することとする。



第4図 村上供養塚平面図

3. 調査経過

この調査経過は発掘調査日誌より抜粋したものである。

3月9日と15日の2回にわたり、調査に先立ち、全景撮影や遺跡の清掃が市教育委員会社会教育課の担当者により行なわれた。

3月20日（水） 晴

市教育委員会にて 調査団と市教育委員会社会教育課の担当者により発掘調査の最終打ち合わせを行なった。

3月21日～23日

発掘現場に調査器材を搬入し、収納庫やローリングタワーを仮設し調査準備を完了した。

3月24日（日） 晴・強風

塚全景の写真撮影を行なった後に塚の南方にかけてグリッドを設定した。都市計画街路3・4・1号線のセンターポイントNo.194と195の直線を基準に2m四方に杭を打った。これは住居址が検出されることが予想されたからである。

平行して平面実測を行なった。墳頂部を0とし20cmのセンター・ラインをとると3m20cmまで測れた。塚は北・東・南側ともすでに削平されていたが、西側の辺とコーナーの一部が残存していたので平面図上に塚は方形であることが現出された。削平された部分はごみ捨て場となっていたので攪乱がはげしい。

残存している西側底辺部に対してほぼ直角に平扣部をなす上部を貫通する形で東側方向へATを設定した。AT上部から北方へ50cmののりを残してBTを、さらに反対側南方へDTを設定した。また西南及び東南コーナーと思われる地点に各CT、ETを設定した。つまり、A・B・DTは主体部を検出するためでありC・ETは周溝をより明らかにするねらいである。

3月25日（月） くもり

作業員と八千代高史学会を動員しATの両端から発掘を開始した。盛土はやわらかい。ワンスコップづつ階段状に発掘作業を進めた。ATとDTの接合部を拡張していった。

3月26日（火） くもり

ATの掘り下げ作業を継続する。BTの発掘に先だって大きな木根をとる。BTの上部から深さ1mの地点、黒褐色土層がはじまる部分から銅銭の腐蝕塊を検出した。これをB-1とした。続いてすぐ近くから同じ銅銭塊が検出された(B-2)。その付近を拡張して

みたが銅鏡は連続してはいなかった。

A Tはだんだん深くなったので断面図をとる都合上特に北面する壁面の整備を指示した。A T上部から深さ2m44cm(A-1)と2m(A-2)の地点からB Tと同じ銅鏡塊を検出した。

3月27日(水) 雨のち雪

悪天候のため作業は休止。

3月28日(木) 晴れたり曇ったり

前日の雪のためにあたり一面は白一色となっていた。

A・B Tの掘り下げを続行した。銅鏡が出土した位置はA・Bともとくに土層の変化は認められない。古墳ではなく信仰上の塚であるという感を決定的にした。

10時30分、八千代市郷土歴史研究会のメンバー10数名が到着した。発掘調査の現地勉強会である。収納庫に模造紙をはりつけ、調査主任が説明を行なった。次いで発掘作業に参加し全員は寒風の中をよく土と奮闘した。

それらの風景を市政映画「八千代の文化」用に毎日映画社が撮影を行なった。

3月29日(金) 晴

B T掘り下げ続行。C・D・E Tの発掘を開始した。A Tの上部から深さ3mをすぎて間もなく、あざやかな赤褐色をした小皿状の土器が次々と5ヵ所(A-3~7)から検出された。この部分を残してA Tをロームまで掘り下げた。このあたりから土層中に粘土や鉄分が多く含まれるようになった。小皿の出土位置を記録し残した部分を注意深くとり除いた。するとA-5と命名した出土位置の近くで、A Tの北壁に玉石かつばの一部と思われる部分が表われた。慎重にその周囲を検出すると白い木粉が多量に土層に混入していて土がやわらかいこと、ポイント棒を突きさすともう一つ固いものがひそんでいることが判明した。つばが2個存在していると判断した。またこの部分を残し、A Tの断面図をとることにした。

C Tから塚のコーナーを検出したが、各Tとも周溝は認められなかった。

3月30日(日) 晴

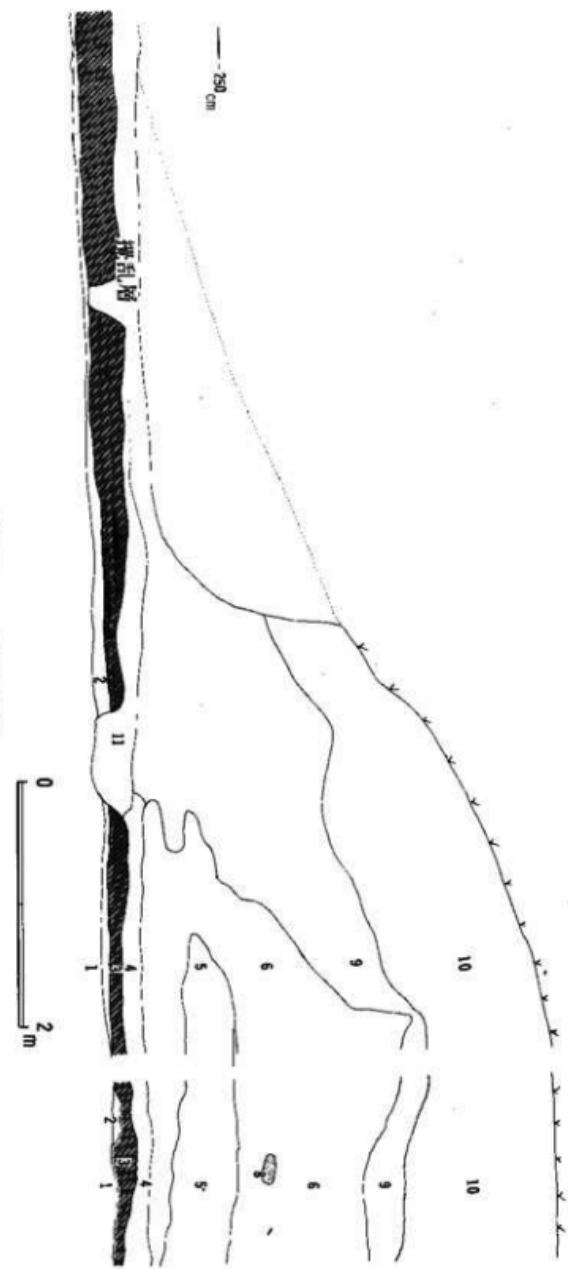
B T掘り下げ続行。C Tの発掘が完了したので記録した。A Tの記録をすませてから主体部であるつばの検出にとりかかった。まず、A・B Tののりをとらねばならないので、そのためA Tに土が落ちないようにトタンを張り棒でつっかいをして作業を進めた。

のりの部分をとり除いてつばの上部にかかったが、粘土や鉄分を多く含む褐色層のみで

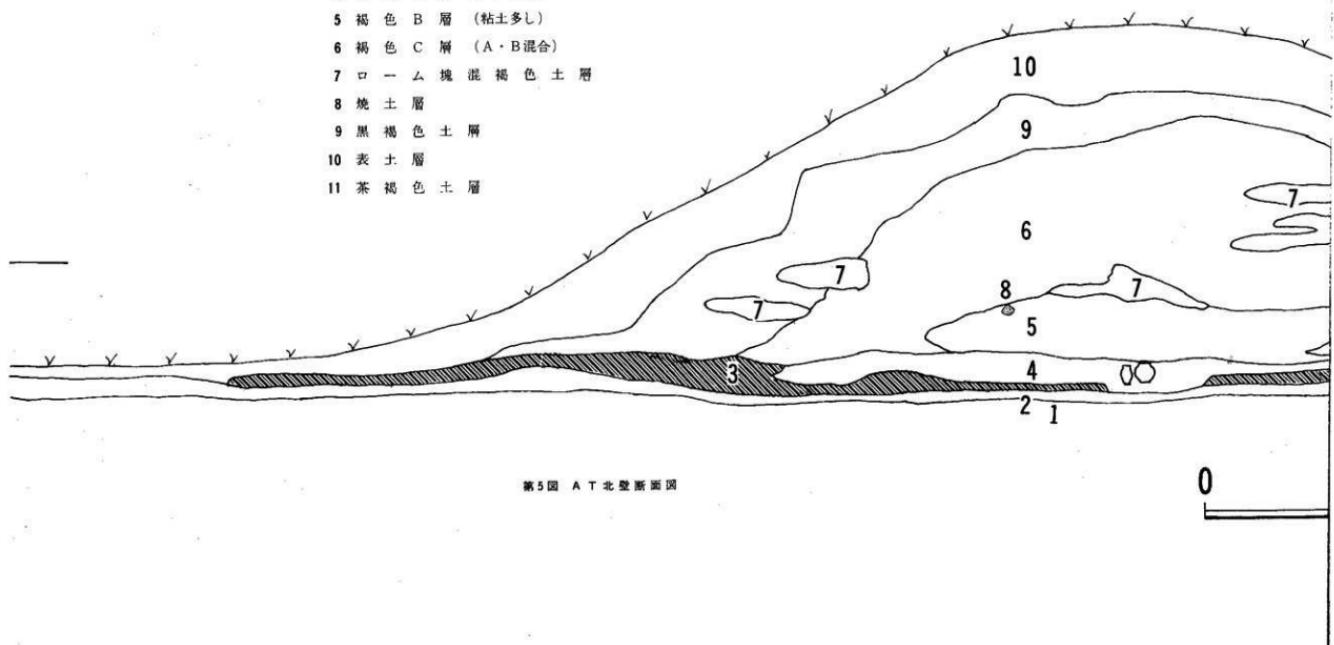
特に変化はない。やがてやわらかい土層となりつば2個が検出された。周囲には白い木粉が混入し、ATと同様な小皿が5枚と銅銭塊を併出した。つばの中には盛土の圧力で半分ぐらいため土が落ちこんでいた。土をとり除くと底部に古銭が多数入っていた。主体部の位置は塚の中心部であった。

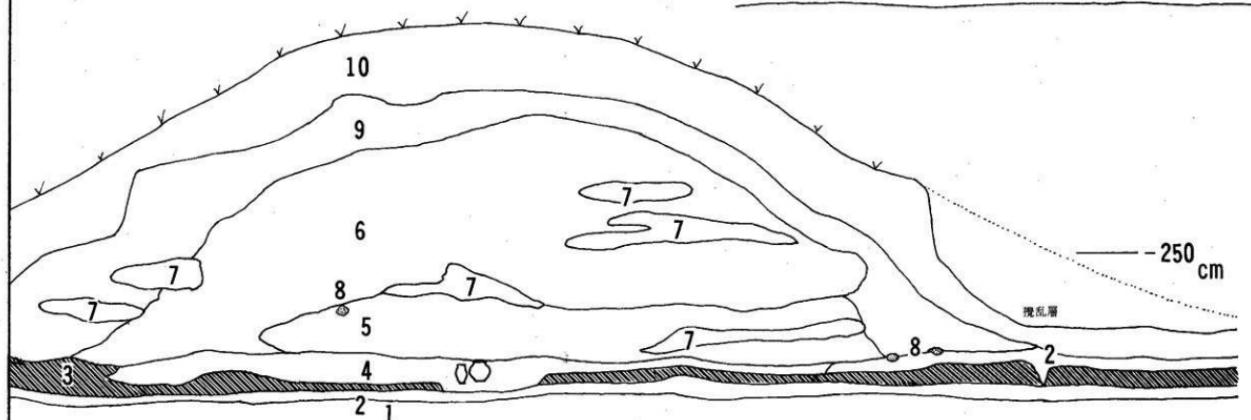
3月31日（日） 晴

ATの主体部の記録と遺物のとり上げを行なった。すべての残りの記録をすませ、諸器材をかたづけ、調査はすべて完了した。



- 1 口一ム層
 2 褐色土層 (旧表土)
 3 黒色土層 (ハニ多し)
 4 褐色A層 (ハニ多し)
 5 褐色B層 (粘土多し)
 6 褐色C層 (A・B混合)
 7 口一ム塊混褐色土層
 8 烧土層
 9 黑褐色土層
 10 表土層
 11 茶褐色土層





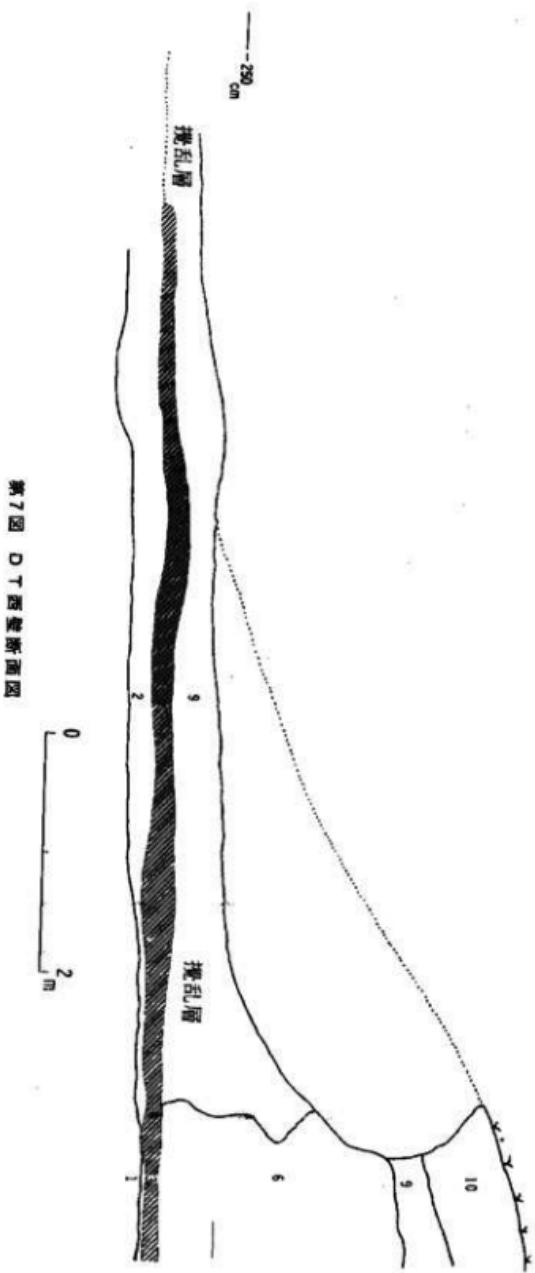
-250 cm

-250 cm

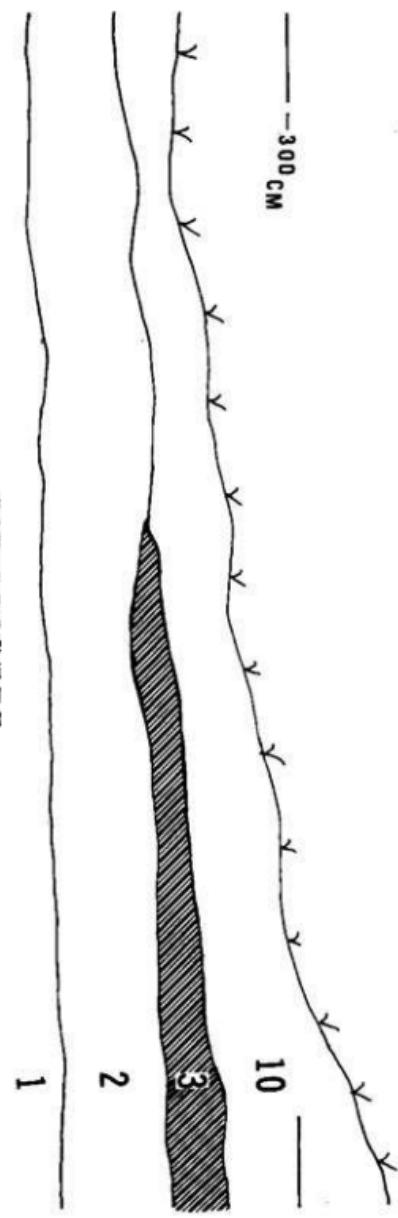
搅乱層

4
m

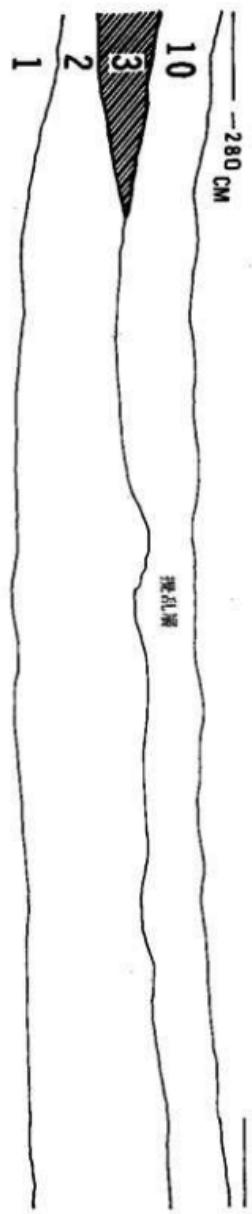
0



第7図 D-T面断面図



第8図 C-T北壁断面図



第9図 E-T東壁断面図

4. 遺構

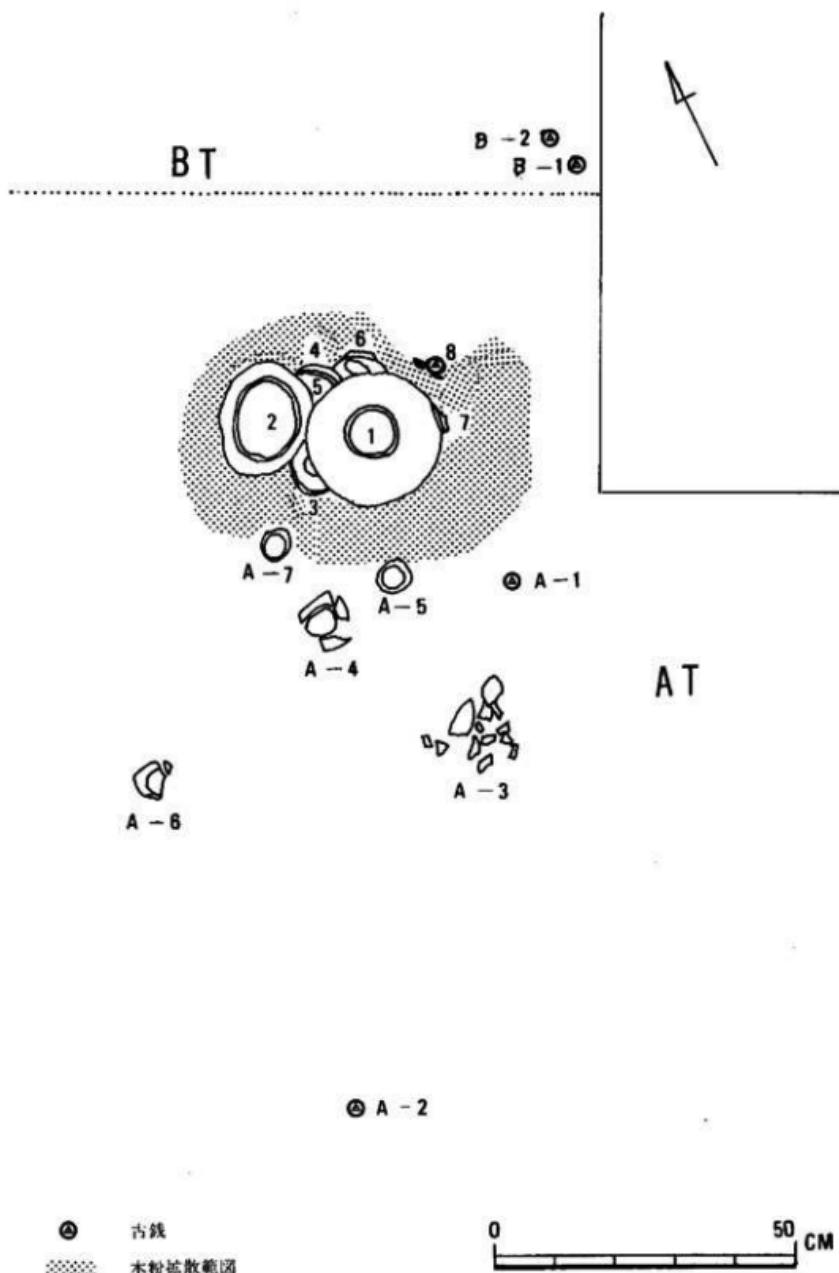
塚は1辺約16mの方形を呈し、塚の上部は平坦部をもち最も高い所で標高31m 3cmである。周溝は認められず平坦な台地に堂々と築かれている。塚の周囲の土が削平されていなかつたならばきわめて整った姿を見ることができたであろう。

塚の盛土状態は断面図で示すとおり、特異である。4層から6層の三つの層は褐色土層を中心とし地元でハニとよばれる鉄分を多く含む部分（A）と粘土を多く含む部分（B）と両方の要素をもつ部分（C）に分けられる。要するに黒土層（旧表土）の上にこの三つの層を主体として塚の内部は構成されている。その間にロームブロック塊が混入している以外は層序間の区別はきわめて不明瞭であった。

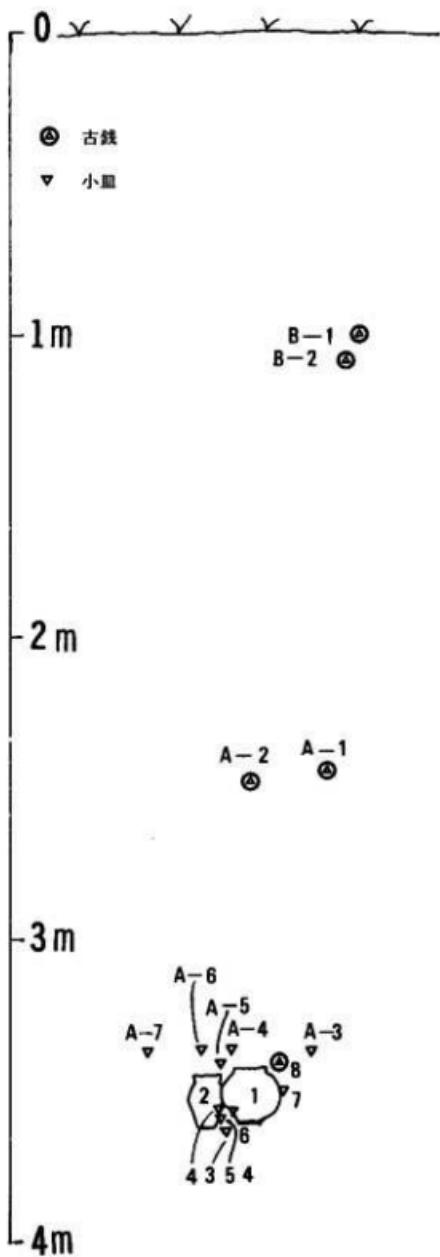
したがって通常の場合、盛土は中心部に向って水平か斜状に堆積されるが、この場合はこの三つの層で当初から主部を形成しその後周囲の土を盛り上げて四角錐状に整形したものと思われる。また盛土層中からは土器片及び石片各1個を発見したのみであった。

主体部は黒色土層をとりのぞきローム層の上の褐色土層に埋め込んだ状態であり、特に土塙らしき遺構もない。

なお4,5,6層は、いわゆる常総粘土層やそれと接する武藏野ローム層と思われる。



第10図 遺物出土平面図



第11図 遺物出土位置図

5. 遺 物

遺物の出土状態は平面に表わすと図第10図のとおりである。出土位置によって A T は A, B T は B, 塚の中心部から出土したものについては主体部と表現した。

主体部はつば2個と内部に銅鏡が、そしてつばに付着するように小皿が5枚と及び銅鏡塊が出土した。つばの周間に白い木粉が上層に拡散していたがこれはつばのふた板と思われる。それがためつばの上部、特に口唇部におびただしく付着していた。またつばの下部から底部にかけては木粉が認められなかった。

A T からは銅鏡が二ヵ所から、小皿が五ヵ所から出土した。

B T からは銅鏡が二ヵ所から出土した。

① つ ば

主体部1 白褐色を呈し素焼で風化が激しく器面は内外ともはげ、胎土はもろく長石や石英の細粒を含んでいる。口縁部径12cm、底部径13.2cm器高は19.1cmである。底部は平底で、窓で時計回りの方向にぐるりとたてに底部整形を行ない、口縁部は複合口縁でふちがだらりとさがっている。器形は頸部がゆるやかに張り最大径をなし、整っている。

主体部2 胎土は灰色で長石や石英の大きな砂粒を含み、焼成良好で茶褐色を呈し光沢がある。肩部から上半には自然釉がかかり青緑色をもつ。口縁部径13.5cm、底部径12cm、器高19.1cmである。底部は平底だが風化がいちじるしくまたはりつけの痕跡をもつ。肩部にかけてゆるやかに立ち上り頸部に至り、口縁部は外反している。内面は頸部と下半から底部にかけて自然釉がかかり、内面全体に輪積みをした後にろくろで指頭によって整形したような痕跡が認められる。底部は円形だが肩部から口縁部は小判形を呈し裏面には大きな傷跡があるが素朴な常滑式の土器である。

② 小皿状土器

小皿10点はいわゆるかわらけというような皿でいずれも同じようなタイプであるが特徴を一覧にすると次表のとおりである。

図No.	出土No.	色 調	大きさ cm			底部整形	底部内面	その他	共通点
			口縁部	底 部	器 高				
1	主-3	赤褐色	9.3	4.1	3.1	ろくろぎり 少しくぼむ	反時計回り の方向に指頭整形(あり)		○胎土は普通 金雲母、長石細粒を含む
2	主-4	#	9.7	4.4	3.3	糸切り	#		○焼成は普通 ○器形は小皿
3	主-5	白褐色	6	2.6	2	でこぼこ	#	主-4の中に入 てあって出土	○形はろくろに てへらで横なで
4	主-6	#	8.4	4.5	2.9	糸切り 多少くぼみ	#		○口唇部調節

図No.	出土No.	色調	大きさ cm			底部整形	底部内面	その他	共通点
			口縁部	底 部	器 高				
	主-7	赤褐色	?	3.6	3.3	糸切り 多少くはみ	反時計回り の方向に指 輪整形痕あり		○胎土は普通 金雲母、長 石細粒を含 む
	A-3	〃	6.0	3.5	2.0	糸切り	〃		○焼成は普通
	A-4	白褐色	7.2	4.4	3.2	無 難作 に糸切り	〃	半壊	○器形は小皿
5	A-5	赤褐色	6.1	2.9	2.2	糸切り	〃	器形 ゆがみ	○整形はろく ろにてへら で横なで
	A-6	〃	6.2	3.7	2.1	〃	〃	半壊	○口唇部調整
6	A-7	〃	6.5	3.6	1.7	糸切り	方向不明	口縁 ゆがみ	

③ 銅 錢

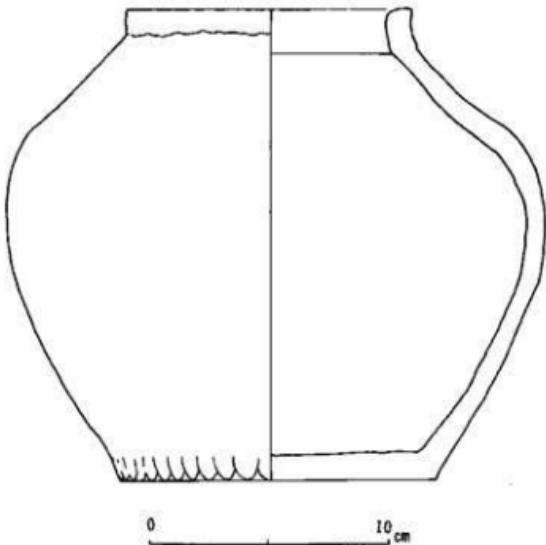
主体部の1・2の中に埋納されていた以外はいずれも土層中の鉱物のために腐蝕がはげしい。出土数は次表のとおりである。

	出 土 数 (合計293枚)	種類		
		寛永通宝	そ の 他	
主体部 1	91枚	86枚	景祐元宝 (1034年) 至和元宝 (1054年) 元祐通宝 (1084年) 元祐通宝 (1085年)	永樂通宝 (1406年) 洪武通宝 (1368年) 洪武通宝 (1398年)
〃 2	150	147	3 懿宗元宝 (1101年) (ワラが付着している)	洪武通宝 (1368年) 洪武通宝 (1398年)
〃 8	12	12		
A 1	5 ?	5 ?		
〃 2	12 ?	12 ?	(ワラが付着している)	
B 1	17	17	(麻ひもの痕跡あり)	
〃 2	6	6		

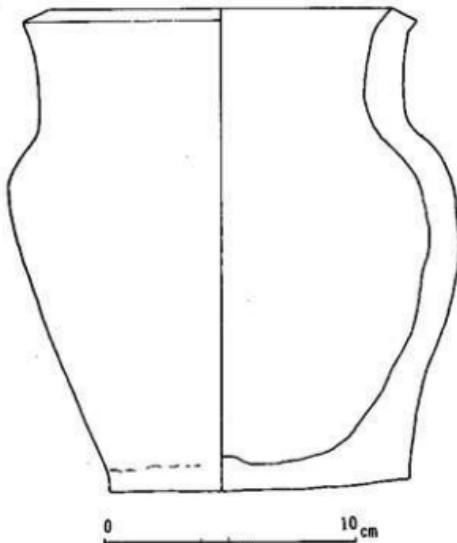
A 1・2地点出土の銅錢は腐蝕がはげしいため判読し推計した。ワラが付着しているのは銅錢をくるんだのであろうか。つばの中の寛永通宝は上層中の鉄分のためすべて密着した状態でありひもは通していないかった。

寛永通宝は、寛永13(1636)年から明暦2(1656)年まで、いわゆる寛文の文錢が鋳造される以前に発行されたところのいわゆる古寛永のみである。代表的なものを拓影したがお藏錢・芝錢・坂本錢など数種類が含まれている。

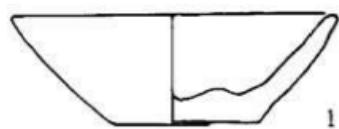
外国錢のうち永樂通宝と洪武通宝は国産である。とくに洪武通宝は裏面に「治」の字をもち島津氏が對明貿易のために安土桃山時代から寛永12~3年頃まで現在の鹿児島県加治木市で錢造させたものである。加治木錢あるいは加治木洪武といわれている。



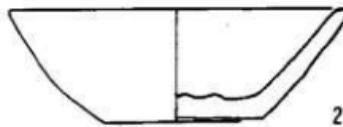
第12図 主体部出土土器 (No. 1)



第13図 主体部出土土器 (No. 2)



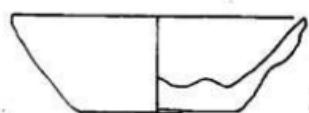
1



2



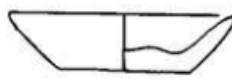
3



4



5



6

0 10 cm

第14図 主体部及びA T出土土器



-



寛永通宝



-



寛永通宝



-



寛永通宝



-



寛永通宝



-



寛永通宝



-



寛永通宝



-



寛永通宝



第15図 主体部 No.1 出土銅錢（その他）



1 景祐元宝



3 元祐通宝

2 至和元宝



5 永樂通寶

4 元祐通宝

第16図 主体部 No.1 出土銅錢 (その2)

0 5 CM



-



寛永通宝



-



寛永通宝



-



寛永通宝



-



寛永通宝



-



寛永通宝



-



寛永通宝



-



寛永通宝



-



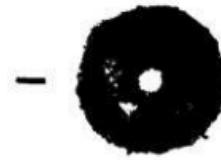
寛永通宝

第17図 主体部 No.2 出土銭銅（その1）

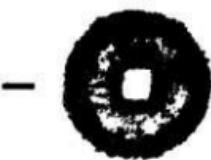




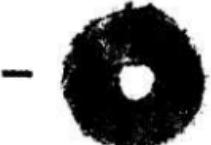
寛永通宝



寛永通宝



寛永通宝



1 皇宋元宝



2 洪武通宝

|



3 洪武通宝

第18図 主体部 No.2 出土銅錢（その2）



6. まとめ

村上供養塚は一辺約16mの方形プランをもつ民間信仰上の供養塚である。塚を構築するのは当然のことながらある機能を満たすためであり、宗教・民間信仰と関係し、塚を作ることは何らかの宗教的倫理を表現しているといえる。ところで塚の形には円形・方形などが多く、種類は宗教的なものに限っていえば、一般的に経塚・狐塚・八幡塚・天神塚・庚申塚・十三塚・梵天塚・山伏塚・行人塚・千人塚・一里塚その他伝説上の塚など無数にある。

八千代市内の古墳以外と思われる塚の例は次表のとおりである。まだ全ばうはつかめていないが行人塚などが多い。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	合計
所在	村上	仲山	神野	大和田新田	下高野	篠塚	尾崎	高本	桑納	麦丸白	仲久保	小池	真木野	逆水	皆田	
数	22	10	38	7	4	4	6	4	7	2	7	2	1	1	1	116
備考					行人塚				庚申塚	庚申塚	行人塚				行人塚	

村上供養塚は、塚に関する古文書や伝説などではなく石碑の類もないので不明な点が多い。いかなる性質の塚であろうか。

村上第1塚群及び第2塚群の内容や関係についてはいずれ千葉県都市公社から報告書が出されるのでそれを持つこととし、ここでは若干の比定をしてみたい。

村上供養塚は村上第2塚群の中にあって、No.2と形状は同じだが周辺と比較するといろいろな点で異なる。第2塚群（No.1～4まで）は千葉県都市公社文化財事務所によって発掘調査がなされたが実見したところによると、No.2はまず盛土の状態は通常の塚の形であり、周囲の土を盛り上げたものであった。遺物は銅錢のみであった。No.1はほんの小さな塚だが内部の落ち込みから銅錢多数と小皿・珠子玉などが検出された。これらの遺物は単なる落ち込みに集中的に埋納されており、壺などはなかった。銅錢は文錢が多かつたようである。

また村上第1塚群のNo.2は大塚で高さ4.5m各辺17～18.5mの方形を呈し遺物は銅錢などが出土している。そのうち村上供養塚と一致する古銭は元祐通宝である。これは中世以降

の塚であるかは判明していない。さらにNo.2と道をへだてた東側のNo.6から14までも調査されたが何らかの供養塚であろうといわれている。

また白井町の大塚という遺跡が千葉県都市公社文化財調査事務所によって調査されたがこの場合、塚は一辺約20mの方形を呈し、高さ5mで、中心部から常滑のつばが検出され銅鏡（北宋・明鏡）と皿8枚などが内部に埋納されていた。つばの位置は旧表土の上であり、盛土も通常の塚のごとく周囲の土を中心部に向って一様に堆積させている。皿は黒っぽく整形はよい。

このようにみると村上供養塚の例はめずらしいといえる。まず築造方式だが、周囲の土をほとんど使わず、別なところから運び前述のように4・5・6層で塚の中核を形成している。これは基壇とはいえない層序である。粘土やハニといわれる部分はローム層下の粘土部分に鉄分が沈殿した層であり、関東ローム層の台地辺縁でよく見られるものである。村上の場合南側の黒沢池に面した台地の崖に見ることができる。おそらくわざわざこのようなかけから運んで大変な信仰的エネルギーを費やし構築したのであろう。

さらに遺物の出土のしかたが不規則である。通常の場合この種の塚は、盛土中に銅鏡を投げ入れた形が多い。村上供養塚の場合は通常の要素の他につばを2個を中心とした埋納が行なわれているといえる。おそらく何かの供養のためにこの地を選び、表土を部分的にとりのぞきつばを2個安置して、各メンバーから集めた錢を埋納し、ふたをして、小皿で御神酒をくみかわしてからつばの周間にその皿を供献し土をよせたもの——と主体部の状態から推測される。そしてAT出土の小皿は出土の高さが主体部より少し高いことと位置がつばの西南側にあるから、つばの上部まで土をかけてから再度儀式が行なわれた痕跡ではなかろうか。小皿状の七器は儀式用の供献皿であったろう。さて儀式が一段落すると例の4~6層が特別に積まれその間銅鏡が投げこまれやがて方形に塚は形成されていったものであろう。そして方形の外周は浅い溝でとりまいたであろう。

以上推測をのべてきたが塚について「北越北線埋蔵文化財発掘調査報告書」(新潟県教育委員会 1974)の第VI章川治百塚第6号塚の稿において、円形プランで断面が半円形をなす塚、方形プランで断面が台形をなす塚など塚の分類がなされているのは大変興味深い。これらとどのように関連するのかは類例が少ないので考察は至難である。

村上供養塚については民間信仰上の供養塚と考えられるが他の多くの要素も考えられし、的確な結論は出し難い。他の多くの類例を待ちたい。村上供養塚の築造年代は出土した寛永通宝が古寛永のみであることからすれば17世紀中葉と考えられる。また出土した加

治木洪式は往時の流通経済を示す参考資料ともなり得るであろうが、当時は加治木洪式よりも明の本錢（輸入銭）の方が量的に圧倒的に多かったことからすれば、本錢が出土する可能性は大きいと考えられるが、本遺跡には見られないことは疑問の一つである。

以上村上供養塚について報告の一端をのべてきたが、最後に発掘調査にあたって八千代市教育委員会・八千代市都市計画課をはじめとして多くの方におせわになり、また御教示をしてくださった諸兄に対し心から感謝申し上げる次第である。⁽⁴⁾

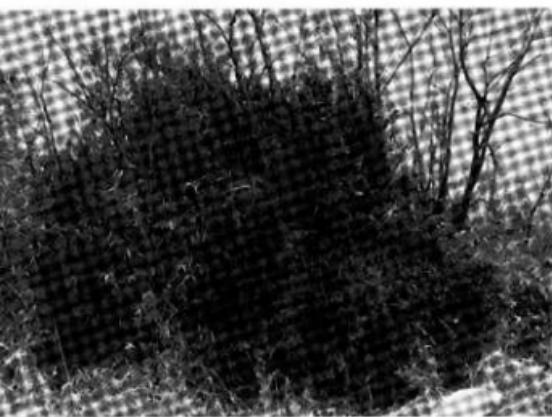
（調査主任） 村田一男

- (1) 千葉県都市公社文化財事務所調査課第2係の諸兄に御教示をいただいた。
- (2) 八千代市村上所在古墳発掘調査概報 千葉県教育委員会 昭和47年3月による。
- (3) 千葉県都市公社文化財事務所調査課第1係の諸兄に御教示をいただいた。
- (4) 銅銭については千葉県総務部文書課の多田正行氏に御教示をいただいた。

発掘調査団名簿

調査團長	増田誠藏	(八千代市文化財審議委員長)
調査主任	村田一男	(千葉県文化財調査員)
調査補助員	八千代高校史学会	
	相川和枝	金子洋子 塩沢真由美
	小幡喜代	門倉孝男 吉田信
	酒井厚子	斎藤和子
	山岸 憲	(東海大学学生)
	大野康男	(東邦大学付属高校)
	黒河節子	(八千代市郷土歴史研究会)
	手代木有児	(八千代市立睦中学校)
	渡辺洋治	(")
	佐藤孝之	(")
	渡辺行晴	(")
	立石孝子	(")
	立石秀一	(")
調査作業員	伊藤光	天川昭夫 相沢琴
	飯島とし	飯島よし 金子久子
	伊藤孝子	伊藤 静 伊藤昭枝
調査団事務局	佐々木優一	(八千代市教育委員会)
	木原善和	(")

図版第1



(1) 発掘前風景



(2) 西方から見た塚



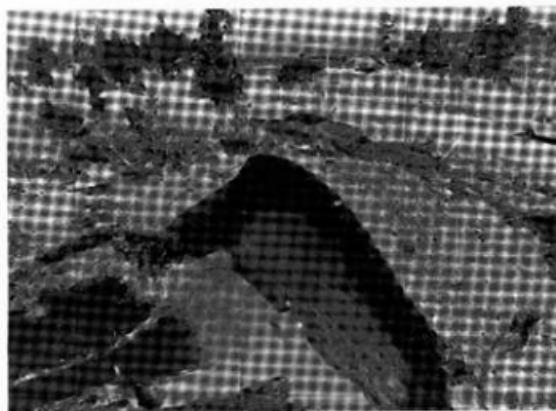
(3) 北方から見た塚

図版第2

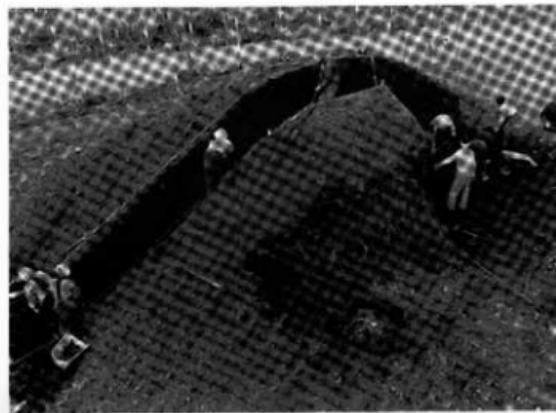
(1) 北方から



(2) 村上第2塚群風景

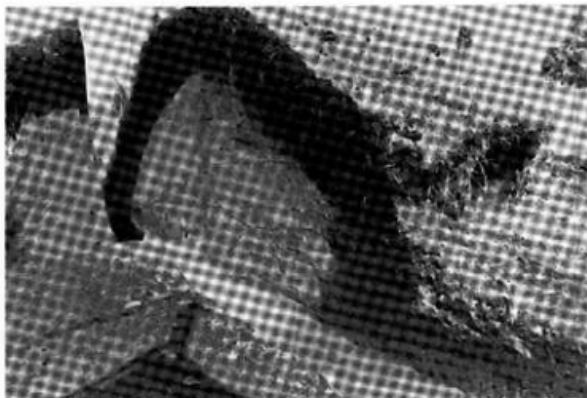


(3) 発掘風景



図版第3

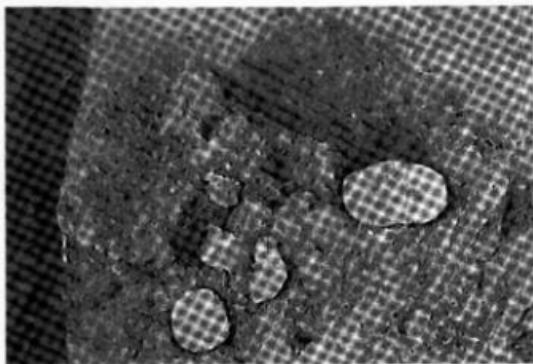
(1) A T 土層断面



(2) A T 記録風景

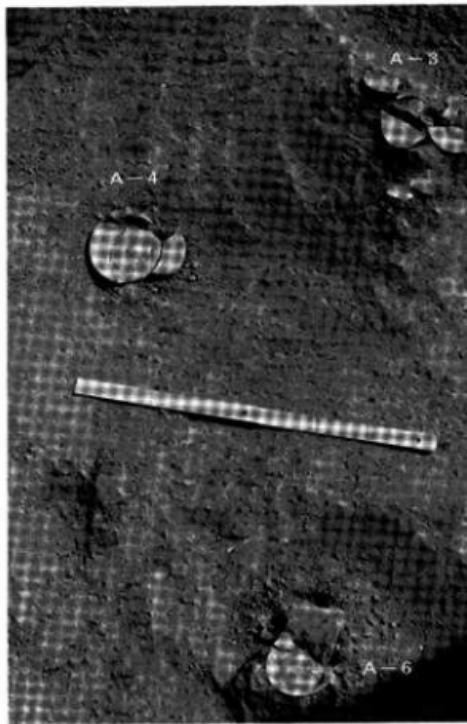


(3) B T 銅錢出土状態

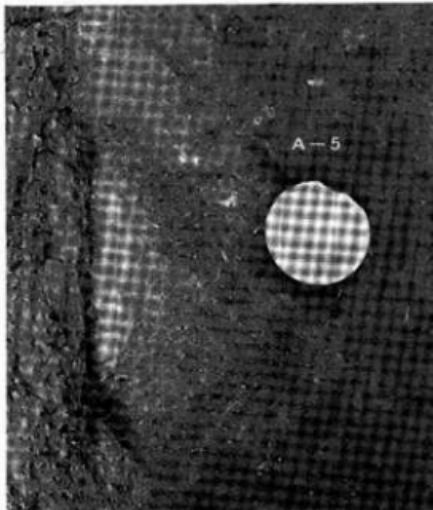


図版第4

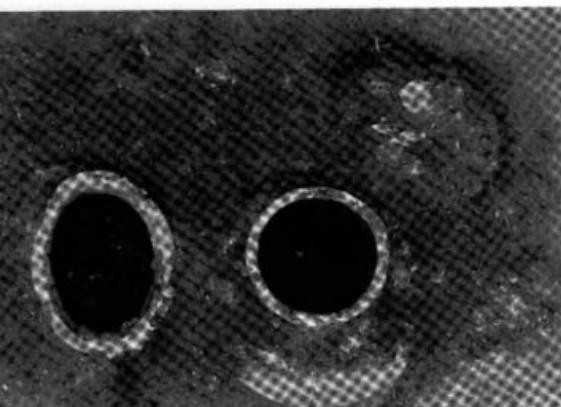
(1) A T 土器出土状況



(2) A T の土器と主体部の壺が露出したところ



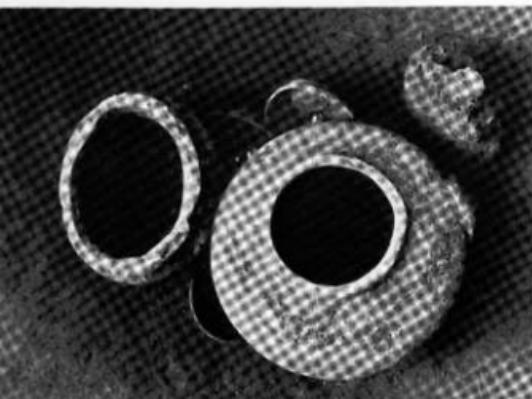
図版第5



(1) 主体部
No.1・2・及び8の銅鏡



(2) 主体南方からBTをのぞむ



(3) 主体部土器出土状況

図版第6

(1) 主体部
No. 1



(2) 主体部
No. 2



図版第7

A T 出土土器



A - 3



A - 4



A - 5



A - 6



A - 7

図版第8

主体部出土土器



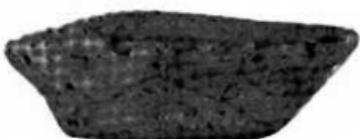
3



4



5

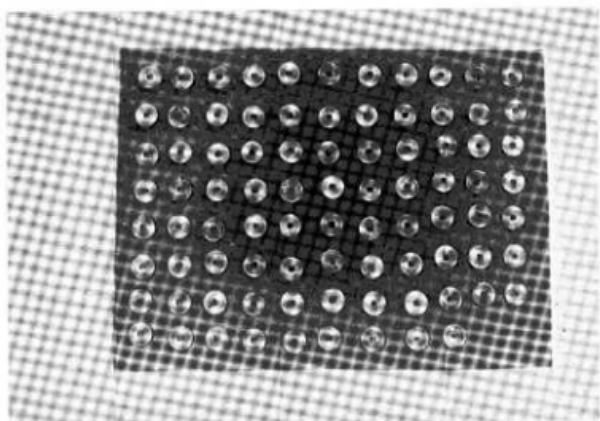


6

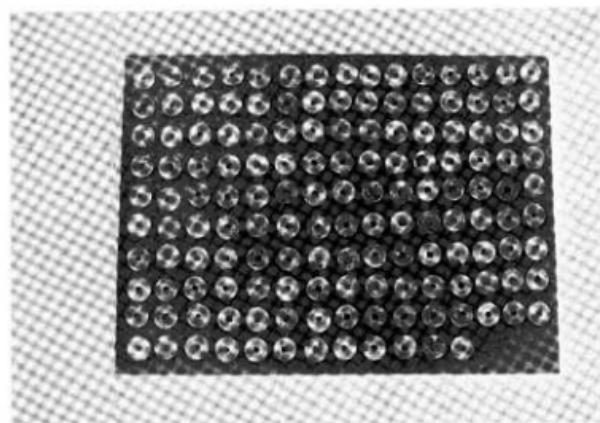


7

図版第9

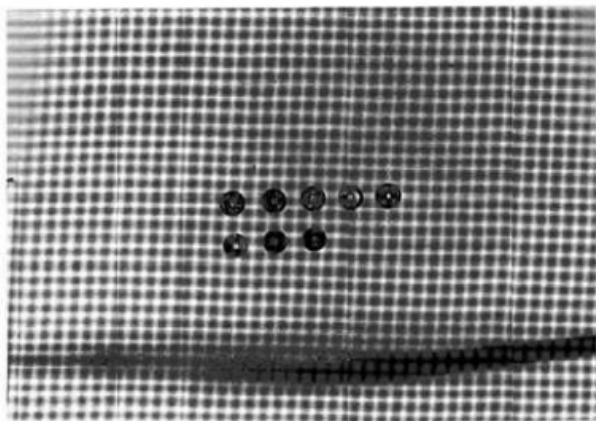


(1) 主体部No.1より出土の寛永通宝

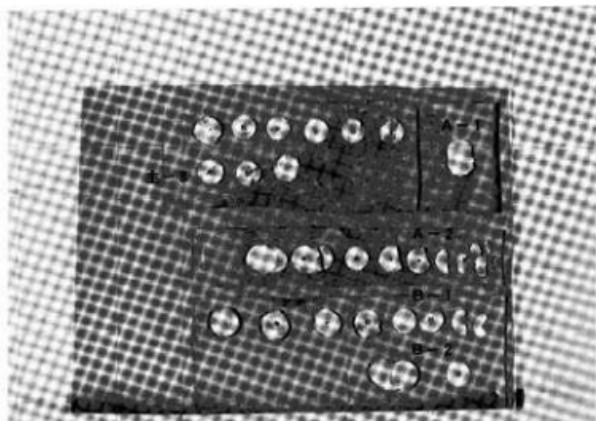


(2) 主体部No.2より出土の寛永通宝

図版第10



(1) 上段は主体部No.1より出土の北宋及び明錢
下段は主体部No.2より出土の北宋及び明錢



(2) 単独出土の寛永通宝

千葉県八千代市
村上供養塚発掘調査報告書
1974

発行 上高野原古墳発掘調査団
八千代市教育委員会
印刷 横文 明堂 印刷所
東京都北区中十条2-14-12